

- 3) 産子体重 3.5 kg 前後の育成方法について、特に注意の必要はない。しかし、一般子牛への注意と同じく、哺育期のエサ付け、食付けには留意されたい。
- 4) 初産分娩後の濃厚飼料給与は、産乳量の 4 割程度とするのが、発育産乳次回種付向上面から云っても無難である。
- 5) 初産分娩牛の母子事故防止から体温測定による分娩予知法を採用し、分娩時の立会を行った方が無難である。

4 関連試験課題名

乳用牛の早期繁殖に関する試験（昭 48～52 岩手畜試）

5 参考資料

試験成績概要報告書 52年度 岩手県畜産試験場

2 乳用初産牛の分娩予知法

1 背景と特徴

乳牛の分娩時には原則として立会いが必要であり、特に初産時には助産が必要となることもある。しかし一般にその予知が難かしく、看視の不行届きからの分娩事故発生も起り勝ちであるので、適確な分娩・予測が必要とされている。

そこで分娩前に体温が降下する現象を利用した、体温測定法を試みたところ、分娩予知が実証された。

2 技術の内容

- 1) 体温測定は分娩・予定日の一週間位前から測定し、その牛の分娩前体温を把握する。
- 2) 体温測定は朝夕の定時（例えば 9 時、16 時）に測定する。

体温は分娩前 1 ヶ月頃から平温（ 38.5°C 前後）より高く推移している。～生理的高温期

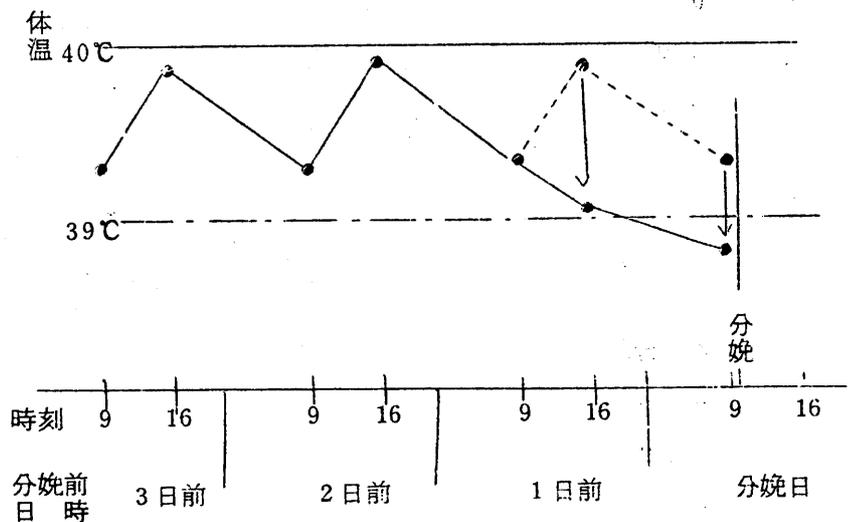
分娩前（0～1 ヶ月）の体温 $^{\circ}\text{C}$ …… 例数 27 頭

	朝（8時30分～9時）	夕（16時～16時30分）
体 温	39.2 ± 0.35	39.7 ± 0.31

- 3) 分娩予定一週間前からの体温が変動して、その測定恒温より $0.8 \pm 0.3^{\circ}\text{C}$ （朝なら朝、夕なら夕の体温との差）降下すれば、その後 1.9 ± 5 時間で分娩に入る。

なお、その確認は、体温降下時 2 回検温すること。

分娩直前の体温降下例（……線は分娩が未だとしたときの仮想体温）



3 指導上の留意点

- 1) 体温測定時間は毎日決めた時間に朝夕行うこと。
定時は牛が安静時間帯とすること。
- 2) 検温値に異常値が出たら必ず再検温して、その真偽を確かめること。
- 3) 体温が急に上昇したら、難産の疑いもあるから特に注意すること。
- 4) この予知法は経産牛にも適用する。

4 関連試験課題名

乳用牛の早期繁殖に関する試験（昭48～52 岩手畜試）

5 参考資料

試験成績概要報告書 52年度 岩手県畜産試験場
酪農ハンドブック 養賢堂

3 日本短角種離乳子牛の体重補正

1 背景と特徴

子牛の発育で、母牛の哺育能力、父牛の能力判定、牧野条件を比較することができる。

現在、日本短角種の子牛は月令や性、母牛の年令などに関係なく、現状で比較しているのが一般的である。しかし、月令、性、母牛の年令により子牛の発育値が異なっているので、その補正值について検討し、1つの目安を得た。

2 技術の内容

1) 日令の補正

$$210 \text{ 日令体重} = \text{生時体重} + \frac{\text{実際の体重} - \text{生時体重}}{\text{体重測定日の生後日令}} \times 210$$

生時体重を測定していない場合は、35kgとして計算